高村光太郎詩集

北川太一編

旺文社

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらんとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値あるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長　赤尾好夫

〔編集顧問〕 小田切進　茅　誠司　竹内　均
外山滋比古　林健太郎　森戸辰男　（五十音順）

旺文社文庫　高村光太郎詩集　定価はカバーに表示してあります

1969年3月1日　初版発行
1980年　重版発行
（乱丁・落丁本はお取りかえしますので本社に直接お申し出ください）

編　者　北川太一（きたがわ たいち）
発行者　立澤節朗
印刷所　横山印刷株式会社／合資会社 中村印刷所
製本所　有限会社 穴口製本所

発行所　株式会社 旺文社
162 東京都新宿区横寺町
電話（編集）03-266-6372
（販売）03-266-6415

0192-610-90-0724 E　08109
© 高村君江・北川太一　1969
（許可なしに転載，複製することを禁じます）
Printed in Japan

旺文社文庫

高村光太郎詩集

北川太一編

旺文社

目次

『道程』 七
失はれたるモナ・リザ 一〇
根付の国 一四
声 一五
廃頽者より 一九
父の顔 二五
泥七宝（抄） 二七
友の妻 三一
人に 三六
涙 四三
おそれ 四四
さびしきみち 四九
或る宵 五三
郊外の人に 五六
人類の泉 五九
よろこびを告ぐ 六四
冬が来た 六九
牛 七一
道程 七九
秋の祈 八〇
＊
雨にうたるるカテドラル 八三
米久の晩餐 九二

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

クリスマスの夜　九八
鉄を愛す　一〇一
とげとげなエピグラム（抄）　一〇四

『猛獣篇』とその時代　一〇九

清廉　一一三
白熊　一一五
傷をなめる獅子　一一八
鯨　一一三
象の銀行　一二四
苛察　一二六
ぼろぼろな駝鳥　一二八
象　一三〇
森のゴリラ　一三三

*

氷上戯技　一三四
車中のロダン　一三六
火星が出てゐる　一四〇
冬の奴　一四四
花下仙人に遇ふ　一四六
母をおもふ　一四八
冬の言葉　一五〇
当然事　一五二
さういふ友　一五五
上州湯檜曽風景　一五七
孤独が何で珍らしい　一五九
刃物を研ぐ人　一六〇
耳で時報をきく夜　一六二
レオン　ドウベル　一六五
もう一つの自転するもの　一六六
ばけもの屋敷　一六七
荻原守衛　一六九

堅氷いたる　一七二
手紙に添へて　一七四
孤坐　一七六
つゆの夜ふけに　一七七
お化屋敷の夜　一八二
銅像ミキイキツツに寄す　一八四
へんな貧　一八六
蟬を彫る　一八八
独居自炊　一九〇
美しき落葉　一九二

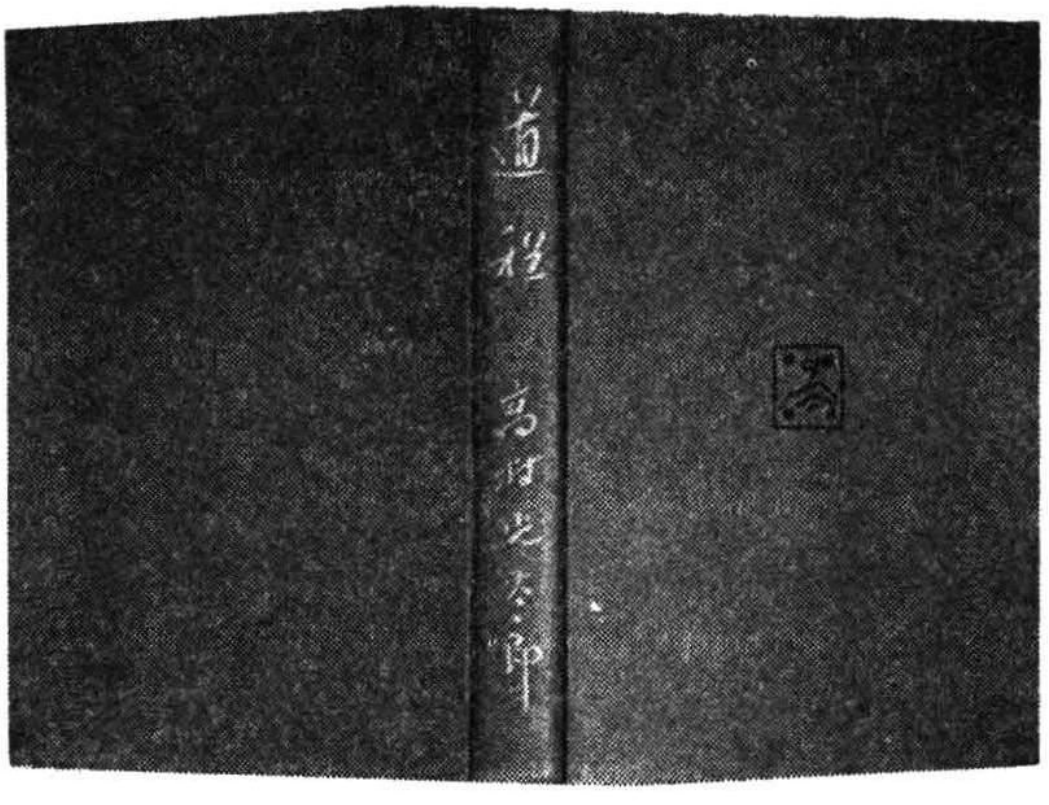
『智恵子抄』　一九五

樹下の二人　一九八
あなたはだんだんきれいになる　二〇二
あどけない話　二〇四

同棲同類　二〇六
美の監禁に手渡す者　二〇八
人生遠視　二〇九
山麓の二人　二一〇
風にのる智恵子　二一二
千鳥と遊ぶ智恵子　二一四
値ひがたき智恵子　二一六
レモン哀歌　二一八
荒涼たる帰宅　二二〇
梅酒　二二二
松庵寺　二二四
元素智恵子　二二六
メトロポオル　二二八
裸形　二二〇
案内　二三二
あの頃　二三四
吹雪の夜の独白　二三六

『典　型』　二三九
雪白く積もり　二四二
「ブランデンブルグ」　二四四
人体飢餓　二四九
月にぬれた手　二五四
山荒れる　二五六
典　型　二五九
クチバミ　二六一
大地うるはし　二六三
十和田湖畔の裸像に与ふ　二六四
弦楽四重奏　二六六
生命の大河　二六八
＊
高村光太郎の生涯　二七一
——「暗愚小伝」をたどって——
「ぼろぼろな駝鳥」について　尾崎喜八　三〇七
読書案内　三一〇
——より深く知るために——
年　譜　三一二
あとがき　三二五

『道　程』



『道程』初版本

第一詩集『道程』は、大正三年一〇月二五日、歌人内藤鋹策が経営する抒情詩社から自費出版された。四六判、角背、三二六頁。明治四三年から大正三年に至る詩一〇七篇(小曲も一つ一つに数えてある)を含む。定価一円。表紙は緑がった青磁色で、背文字は金箔押しの太いペン字、当時としては類の少ないこの簡素で高雅な装幀は、刊行者内藤による。

内容の構成については作者自身の文章がある。

「『道程』の構成がいはゆる詩集のやうでなくて、むしろ一つの雑綴のやうであるといふ人もあるが、その通りである。当時私は世人のいふ詩集といふ特殊観念に鼻もちがならず、(詩集にガラスの宝石をちりばめるといつたやうな観念だ。) ただ製作順に自己の詩を並べて、注意深い読者におのづから筆者内面のエヴオリユウションを見てもらはうとしたのである。それ故、装幀も無装飾、まるで違つたカテゴリイに属する詩篇も平気で並べたのである。」(「某月某日」)

『道程』は、この国の生んだ最もすぐれた詩集の一つと

して高く評価されるのみならず、一人の見事な生活者の内面を記録して、いまもなお読む者に強い感銘を与え、さまざまな可能性をもって語りかける。

ここにはその中から二九篇を選んだ。

*

「雨にうたるるカテドラル」から「とげとげなエピグラム」までの一四篇は「道程以後」の名で呼ばれる詩群に属するもので、大正一〇年から一二年までの作品を含み、「道程」後期詩風の一つの完成と見られる。これらは光太郎詩の一つの峰であるとともに、日本近代詩の記念碑的な作品群でもある。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

失はれたるモナ・リザ(1)

モナ・リザ(2)は歩み去れり(3)
かの不思議なる微笑(4)に銀の如き顫音(5)を加へて
「よき人になれかし」と
とほく、はかなく、かなしげに
また、凱旋(6)の将軍の夫人が偷視(7)の如き
冷かにしてあたたかなる
銀の如き顫音を加へて
しづやかに、つつましやかに
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

(1) 明治四三年一二月一四日作。翌年一月号の『スバル』に発表された。

(2) Monna Lisa　イタリア・ルネサンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチがフィレンツェ市民ジョコンドの妻モナ・リザを描いた油絵がある。しかしここでは、その名によって呼ばれる現実の一女性が暗示される。かつて作者はこの詩のあとに「わが愛せし某楼の女を我仮にモナ・リザと名づけたりき」と注したが、それは吉原河内楼の娼妓若太夫という名古屋生まれの女性であった。

(3) その女性をめぐって作家木村荘太との間に恋争いがあった。結局女は作者よりも遊びなれた荘太に傾き、作者から去る。その苦しい恋と失恋とは、作者が詩を書きはじめる一つの大きなきっかけとなった。

深く被はれたる煤色の仮漆こそ
はれやかに解かれたれ
ながく画堂の壁に閉ぢられたる
額ぶちこそは除かれたれ
敬虔の涙をたたへて
画布にむかひたる
迷ひふかき裏切者の画家こそはかなしけれ
ああ、画家こそははかなけれ
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
心弱く、痛ましけれど
手に権謀の力つよき
昼みれば淡緑に
夜みれば真紅なる

(4) 油絵「モナ・リザ」の神秘な微笑と現実の女の微笑とが重ねあわせられている。

(5) 顫音は音楽用語でいうトリルで、書かれた音とその二度上の音とを早く交互に奏する最も普通な装飾音だが、ここでは銀の如くと形容される笑い声を意味する。おそらく、細く高く、気品も感じられる澄んだ声であったろうか。

(6) 作者は別の詩で恋敵である木村荘太に「優勝者なる友よ／彼の人の歩みは君の方に向へり。」とよびかけている。勝ちほこる男のかたわらにいる女性の複雑な心理が、恋を失ったものの側からここにも、それを説明した次の行にも表現されている。

(7) vernis 画面を保護するために塗るニス。

(8) このあたりの表現は、女が荘太の愛を得、契約の期限も終え

かのアレキサンドルの青玉(せいぎょく)(11)の如き
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり
我が魂を脅(おびやか)し
我が生の燃焼に油をそそぎし
モナ・リザの唇(くちびる)はなほ微笑せり
ねたましきかな
モナ・リザは涙をながさず
ただ東洋の真珠の如き
うるみある淡碧(うすあを)の歯(14)をみせて微笑せり
額ぶちを離れたる
モナ・リザは歩み去れり

モナ・リザは歩み去れり

て、この年の暮れには自由の身になるという事実をその背景に持つ。画堂は画廊と同じ。モナ・リザの絵はルーヴル美術館にある。

(9) うやまいつつしむこと。作者はこの女性を娼婦としてでなく、一人の対等の女性として、心をこめて愛した。

(10) toile カンバス。

(11) この頃の作者の意識を簡単に説明するのはむずかしいが、同じ女性にあてた別の詩でも「悲しき女よ。／汝が斯くも抱きしは謀反人なり。／裏切りするものなり。／むかし、さんたくるすの血を売りたる卑しきものの DESCENDANCE (子孫) なり。」と歌っている。画家はもちろんモナ・リザの描き手と重ね合わせられた作者自身。

(12) このような職業の女性の習いとして、かけひきに敏感な。

かつてその不可思議に心をののき
逃亡を企てし我[15]なれど
ああ、あやしきかな
歩み去るその後かげ[16]の慕はしさよ
幻の如く、又阿片を燔く烟の如く
消えなば、いかに悲しからむ
ああ、記念すべき霜月の末の日[17]よ
モナ・リザは歩み去れり

(13) alexandrite 光線によって色を変える金緑石の一種。昼と夜との変貌の著しい女性にたとえられる。

(14) この女性のよくそろった美しい歯のことは木村荘太も書きとめている。

(15) 注(11)と同時に書かれた詩にも「悲しき女よ。／逃亡は余の責なれど、……」とか「ああ、悲しき女よ。／己は露西亜へ逃げるのだ。」などの言葉が見られる。

(16) うしろすがた。

(17) 霜月は十一月。この月二十日には日本橋大伝馬町の三州屋で新しい芸術家達の集まりパンの会の大会が催された。荘太はこのとき、谷崎潤一郎を介添えにして、光太郎に決闘を申し込もうとしたという。おそらく、この月のおわりに、決定的な訣別が訪れたのであろう。

根付の国[1]

頬骨が出て、唇が厚くて、眼が三角[2]で、名人三五郎[3]の彫
つた根付[4]の様な顔をして
魂をぬかれた様にぽかんとして
自分を知らない、こせこせした
命のやすい[5]
見栄坊な
小さく固まつて、納まり返つた
猿の様な、狐の様な、ももんがあの様な、だぼはぜの様
な、麦魚の様な、鬼瓦の様な、茶碗のかけらの様な[6]日
本人[7]

(1) 明治四三年一二月一六日作。前の詩と同時に翌年一月号の『スバル』に発表された。
(2) このあたりの日本人の容貌のとらえ方には、彫刻家としての作者の眼が感じられる。
(3) 三五郎という名の根付作者は見当たらない。昭和四年に出た『現代詩人全集』では周山と改められている。周山は江戸期の著名な作者で根付彫刻再興の祖といわれ、怪奇人物などを得意とした。しかし、それ以後再び三五郎が用いられているのは、作者がその語調を愛したためであろう。
(4) 根付は煙草入れや印籠などに付属する小工芸品で、ひものはしにつけ帯などにはさんで下げるために使う。精巧ではあっても、小さく、せせこましく、すすけたような、この国や人の象徴。
(5) 一つの背景として書いてお

声[1]

止せ、止せ
みじんこ生活[2]の都会が何だ
ピアノの鍵盤に腰かけた様な騒音と
固まりついたパレット面[3]の様な混濁と
その中で泥水を飲みながら
朝と晩に追はれて
高ぶった神経に顫へながらも
レッテルを貼った武具[4]に身を固めて
道を行く其の態は何だ
平原に来い
牛が居る

くが、大逆事件というものが起こり、幸徳秋水らをはじめとする社会主義者の一団がとらえられたのは四三年初夏のことであり、秘密裏に裁判が進行し、罪に値しない多くの人々に死刑が宣告されたのは、この詩の発表された一月のことだった。

(6) 人まねばかりする猿。人をだますずるい狐。けものでありながら空中を飛ぶ奇怪なももんがあ。どろくさくて喰えないだぼはぜ。群れたがるめだか。こけおどかしの鬼瓦。それこそ全く役に立たない茶碗のかけら。

(7) このたたみかけるように一気に吐き出された痛罵は、最後の「日本人」という言葉にむかってなだれ落ちる。自分もまたその中の一人である「日本人」の上に。

発表当時、こんなものは詩とは言えないとののしられたという

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com